
4月1日

蓮枯Re:

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

4月1日

【Nコード】

N5696K

【作者名】

蓮枯Re：

【あらすじ】

恋など、必要ない。

そう思っても、引き離せないもの。

自分の心が、正直になってしまっ…。

もうすぐ高校生になる柚良は、推理小説が大好きな女の子。

暇があれば本屋に行き、少し立ち読み…気に入った物は買う。

最近それが趣味だった。

ある日、いつものようにレジに並び、本を買おうとしていたところ

へ…

恋をする意味を探し、探し終えぬうちに初めて恋をする。
そんな主人公の心は、誰でも一度は経験するはず。

恋も知らなかった少女の青春を描いた小説です。

プロローグ 15円

鬱陶しいな、心って。

分かっている。結局はどうにもならないって。だけどつい、君の声を聞くとその方向を見る。馬鹿だな、私。

何を期待しているんだろう。その声が、私に向けられているとも思っているのだろうか。まったくもって馬鹿な思い違い、ぬか喜び。

期待した分だけ、落ち込んでしまつと私は学習したのに、ずーつと同じことを繰り返すつもりかな。

君が視線を向けている方へ視線を向け、君が友達と話している会話が特別耳に入り、君の癖を自分で実行してみたり、君が座っている席を確認したり、歩いて行く方向を目で追ってしまったたり。

いわゆる、ストーカーみたいだ、とつくづく改めて思う。

君が好きになる物は、私も好きになりたくて、君が笑っているのがとても嬉しくて。

その笑顔が誰に向けていられたとしても。

「えっ…もうこんな時間…」

近くの本屋で立ち読みに耽って、もう午後六時。好きな事をしていと時間がたつのが早いというのは、このことらしい。少し面白そうな本を見つけたので、ちょっと読んでみよう、と思っただけで、かり本に夢中になり、三分の一ほど読んでしまった。

しかし、いざ買うとなると少し躊躇う。この本の最後の種明かしが面白くないかもしれない。過去に、推理物の本を買って、最後の結果が分ってしまった面白くない、という本を買ってしまったことがあるからだ。

ここまで読み進めてしまったから、かなり先が気になってしょうがなかった。とぼとぼと歩き、レジの列の一番後ろに並ぶ。お金が

足りるかどうかが心配なので、鞆から財布を取り出して中を見ようとしていたら、脇に挟んで持っていた本を落としてしまった。

「あつ……」

本が落ちた。わかってはいる、が、今は財布から出した小銭で手がいっぱいな為、すぐに拾えない。それでも拾おうと思ってしゃがみこみ、本をつかもうとしていたら、小銭までもが落ちて転がってしまった。

「あーもうっ」

どうしてこんな風に嫌なことが繰り返されるのだろうか。これが、泣きっ面に蜂。

とりあえず、手に残ってる小銭を政府の中へ、落とさないように入れて、落ちた小銭を拾い集めていく。ふと、視線を感じたて、周りを見渡すと、列に私と同じくらいの男子がこつちを見て笑っている。相手は立っていたのでよく顔は見えなかったが、たぶん、馬鹿にしているんだろう。ものすごく恥ずかしくなつて、視線を小銭に戻す。なんでこんな時に限って小銭が多いのかな。イライラする。落ち込みながら拾っていると、近くにしゃがみこみ、

「大丈夫？」

と誰かが声を掛けてくれた。やっぱり、親切な人もいるんだ。そう思って、嬉しくて顔をほころばせながら顔をあげたら、しゃがんでいるのはさっきの人……また馬鹿にしに来たのか。

さっきは顔がよく見えなかったが、今は見えた。やっぱり笑っている。だが、優しそうな笑いだった。好きな顔だな、と思った。

そう思っていると、彼は落ちた本を手にとった。ぼーっと顔を見てしまっていた。なんでだろう。急いでまだ落ちていた小銭を拾った。拾い終えて立ち上がると、彼も立ち上がる。ふーっと息をつく。やっと片付いた。

「この本、俺が気になってたやつだ。俺も買おっかな」

「ふーん……じゃあ買えば？」

「んー……今はこれ買っし、また今度にする」

……何故、そんなことを私に言う？ 買うなら勝手に買えばいいのに。でも、嬉しかった。この人の顔とか雰囲気が好き。そんなことを考えてしまっていた。

何考えてんだろう。この人とはこれっきりなのに。いや、でももしかしたら……。

「次のお客様どうぞ」

「あ、すみません」

レジの方を向き、急いで財布をまた開け、小銭を出す。レジに表示されている金額は、五二五円。手の上に全部のせてある所持金の金額、五一〇円。全身をさーっと汗がったる。

ないかないかと財布を覗き込む。……無い。

「お客様？」

諦めるしかないようだ。ここまで来てお金が足りないとは。迂闊。恥ずかしいなあもう。

「や、やっぱりやめときます」

落ち込み加減にそう言うと、すぐ後ろの彼が口をはさむ。

「え、お金足りないの？」

彼が少し笑いながら言う。なんでそういうこと言うのかな、余計恥ずかしくなるって。

少し彼の方を見て、何か言おうとしたが、何も言えなかった。何も言えずに突っ立っている、彼が財布から十円玉と五円玉を取り出す。

「はい、これで足りた」

そう言って彼は足りなかった十五円を、五一〇円が置いてある私の掌に置いた。うまく彼の考えが読み取れなくて、ぼーっとしている私を彼は急かすように、

「早く代金払えって。遅い！」

と、文句を言う。その時は、列には他にも客さんがいて急がないといけないと思うのと、頭が困惑して冷静な判断ができなかったため、その本を買ってしまった。

代金は、五二五円だった。

買い終わってから、ようやく終えてほっとした安堵で、冷静さを取り戻した。勢いで買ってしまったが、この本の十五円を出してもらったのは彼だ。

彼は自分の本を買い終えて、何事もなかったのように立ち去ろうとした。その彼を、反射的に呼びとめた。

「あの…さっきはありがとう」

彼の目をしっかりと見た。彼もこっちを見ている。こっちが見ているのに、相手の目の奥に吸い込まれるような気がして、我慢できず少し目をそらした。妙に顔が熱い。

「いいって。十五円くらい」

「今度ちゃんと返すから」

「今度って？」

彼がまた優しくそうに笑う。その顔を見ているだけで私は嬉しくなる。ずっとこのまま喋っていたい。

だが、それは叶わぬ夢。この彼とはたぶん、もう会えないだろう。今度なんてなかった。

「じゃあ…いつか！ いつか絶対返すから！」

「わかった、わかった。じゃあ、俺はその『いつか』を楽しみに待って」

「うん、じゃあね…」

彼は小さくこくりとうなずき、踵を返して出口ドアへ向かっていった。

彼がこの本屋を出て行ったあとも、私はまだそこに突っ立っていた。脈がどくどくと流れているのがわかるし、顔も熱い。

もう会えないはずなのに、そんな気がしない。

どうやら、私の初恋は名前も知らない彼に注がれてしまったようだ。

私は、『いつか』を楽しみにして、本屋を出た。

外はまだ肌寒い。もうとっくに春は来たというのに。

本日、四月一日、『エイプリルフール』。今日起った出来事は、
小さな嘘にすぎないのだろうか。

プロローグ 15円(後書き)

初めての小説に緊張していますw

まだまだ文章構成などが、ぐちゃぐちな気がしますが、アドバイスなどがあればよろしくお願いします。

修正点・改善点があれば、コメントお願いします。
読んで頂き、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5696k/>

4月1日

2010年10月9日21時48分発行